

明治太政官制下における博物館の制度化：「神代」 および祭政一致思想との関係に注目して

高久, 彩

<https://hdl.handle.net/2324/5068285>

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（学術）, 課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏 名 : 高久 彩

論 文 名 : 明治太政官制下における博物館の制度化
—「神代」および祭政一致思想との関係に注目して—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、東京国立博物館の沿革に関して、とりわけ明治初期の太政官制のもとで「博物館」（東京国立博物館の前身）が「列品」（収藏品）を制度化した過程を考察することによって、明治国家が実現しようとした祭政一致と「博物館」の制度設計との相互関係を検討することである。

西洋近代では、ミュージアムの公共性は、政教分離が行われ世俗化がなされて成り立つと言われてきた。しかし、日本の博物館制度では、「神代」から連綿と続く天皇の“歴史”が重要な地位を占め、その根底には太政官が主導した祭政一致の思想との関わりがみられる。この事実を照らすと、国家が祭政一致を行いつつ、博物館を制度化するということはどのような意味を持つのかという疑問が生じる。この疑問を解明するため、本論文は、「博物館」が「もの」を分類し序列化する過程を分析するとともに、明治国家が構築した「博物館」の特質を析出することを通じて、明治国家における西洋近代ミュージアム制度の受容の一端を捉えることを目指した。

本論文は、序章、本論の三部八章および終章で構成され、本論の第一部は「博物館」における列品分類体系の構築、第二部は太政官の祭政一致思想と明治天皇の即位儀礼との関係、第三部は「博物館」制度における「神代」の観念が主題テーマである。本論文は、従来の研究が自明視してきたミュージアムの普遍性、発達史観や近代化などの西洋近代の価値体系の普遍性を相対化する視座に立ち、明治初期の太政官制のもとで制度化された「博物館」の特質を検討しようとしている。そこでは、明治天皇の即位儀礼における「歴史」の表象と儀式の実態を分析し、その上で「神代」以来の“歴史”を基軸とした列品制度の形成、特に価値観と評価基準、科学的知見に基づいた調査や教育への影響を解析することによって、日本における西洋近代ミュージアム制度の受容の特性を理解することを試みた。本論文は、明治5年（1872年）から明治22年（1889年）に形成された博物館を「博物館」と総称する形で叙述を進め、研究対象とする期間は、とりわけ太政官制下の明治初年から明治15年（1882年）の「博物館」開館に至るまでである。

序章では、研究背景と問題意識、先行研究の成果と課題、検討方法と検討課題を整理した。

本論の第一部では、「博物館」が必要とした“歴史”を捉えるため、「博物館」列品分類の構築過程に注目した。第一章は、19世紀に開催された万国博覧会の出品物に対する西洋と日本の認識の差異、それを踏まえた明治政府の博物館政策と国家像を明らかにした。第二章は、「博物館」の歴史観を分析し、「神代」や神仏分離に基づいた「博物館」制度の設計思想を究明した。

第二部では、太政官の「復古」の観念とその歴史観を明確にするため、第三章は、明治天皇の「御即位の大礼」の構築過程に着目し、新たな儀式を通じた祭政一致の実践とそこでの「神代」の政治的機能、「復古」観念が果たした役割を検討した。第四章は、「大嘗会」の構築過程に注目し、祭具の配置や使用方法に係る分析を通じて、太政官の祭政一致思想に依拠した「神代」以来の歴代天皇の“歴史”とその意味を明らかにした。

第三部では、「博物館」の“歴史”実践を究明した。第五章は、明治初期の「古器旧物」の収集や展示における神祇行政の教化の実践と思想を析出し、明治4年(1871年)の太政官布告の「古器旧物」分類の特質を検討した。さらに、第六章は、明治政府が対外的・対内的に示した歴史叙述と「博物館」の歴史叙述を比較し、「博物館」の「神代」を踏まえた“歴史”の特性を把握した。第七章は、「博物館」運営の実態が、式部寮の祭政一致に基づいた国民教化の実装や、天皇の文化的優位性の顕示を補強していたことを提示した。第八章は、「博物館」と教育博物館(国立科学博物館の前身)の収集・分類・展示を比較検討し、「埋蔵物」に係る「博物館」の価値基準と調査方法が地球や人類の歴史の解明に必要とされる科学的手法を取り入れず、「神代」から継承する歴代天皇の“歴史”とその慰霊に必要な古典や墓誌に依拠したことが確認された。

終章は、本論文の検討結果を踏まえて、以下の結論を述べた。西洋近代の価値体系を具現化したミュージアムのあり方、そして、それと不可分の関係にある科学性や専門性と比較すると、日本の「博物館」の制度化は、西洋の世俗化や啓蒙と表裏一体をなすキリスト教のイデオロギー的側面を強く拒絶しつつも、他方で「もの」を通じた大衆教育のための装置や分類などの技術を導入し、同時に太政官の祭政一致を理念的根拠として構築された。そのような博物館の制度化は、天皇の神聖化および天皇制イデオロギー形成の一翼を担っていた。さらに、明治国家のミュージアム制度の受容は、非西洋独自のあり方を示しながら、逆説的に西洋ミュージアムに由来する普遍的特質を映し出していた。以上が、本論文の検討を通じて明らかとされた「博物館」の特質である。